明治維新と噺家たち

激動の時代の落語界を活写

柏木新著

日本が幕末から明治へと激しく変動したあの時代に噺家たちはどう生きたのか。興味深い多くのことを教えてくれる本である。

都々一坊扇歌や四代目三笑亭可楽等々、幕末の噺家たちが勤王佐幕の嵐の中に登場し、可楽などは薩長軍に抵抗して獄死している。明治に入って自由民権運動が盛んになると川上音二郎たちが現れるが、川上は噺家としては「浮世亭〇〇」と名乗って活躍したそうだ。初の女性落語家や外国人落語家も登場する。

あの頃つくられた古典落語には結構翻案物があって、三遊亭圓朝などもだいぶん取り組んだのだという。名作「死神」も圓朝による翻案物で、原典はグリム童話だそうだ。また、言文一致の口語体による文章がなかなか書けずに弱っていた二葉亭四迷は、坪内逍遙から「圓朝の落語通りに書いてみたら何うか」とのアドバイスを受けた。それで、三遊亭圓朝の噺の速記本を参考にして取り組んでみた結果、明治20（1887）年、言文一致体による小説「浮雲」がついに生まれたのである。噺家は、日本の近代文学に大いに貢献したことになる。

「演歌」という語の意味合いが明治の頃と現在とではまったく違っているのも、面白い。自由民権運動の活動家たちは、演説を中止・禁止されると「演説内容に節をつけて歌って、政治批判をおこなうようになった」、それがそもそもの「演歌」（演説歌）だそうである。

そのように、噺家たちは時代の波をかぶり、政治や戦争の影響を受けながら生きた。著者は、明治時代の取り締まりのあり方が「昭和の戦争時代の禁演落語と国策落語に繋がっている」ことを物語った上で、「日本の誤った歴史と戦争の愚かさ、平和の尊さを忘れてはならない」と説く。考えさせられる視点だ。

巻末には、フランス人ジュール・アダン著「日本の噺家」の日本語訳が収録されている。明治時代の寄席の様子が実に詳しく活写されており、貴重な資料である。

評　前山光則（作家）

（本の泉社・2000円）

著者略歴　かしわぎ・しん　1948年生まれ。話芸史研究家、演芸評論家。歴史学研究会会員。『落語こぼれ話』『国策落語はこうして作られ消えた』などの著書がある。